

駿河和染

静岡では、紺屋町など染織に関する地名が残っており、古くから染物が盛んに作られてきました。

駿府の染物屋、紺屋は、大きく二つに分けられます。一つは悉皆（しっかい）と称される業種。友禅染のような京染めから洗い張り、仕立てなど着尺の加工をする染物です。もう一つは、印物と呼ばれる半纏（はんてん）や暖簾、前掛けなどを藍染めする紺屋です。

静岡の紺屋は、大名紺屋と呼ばれた新聞家のような大きい店を初めとして、紅紺屋、櫛紺屋、稲葉紺屋、伊勢紺屋などいくつかの系列が存在しました。静岡の和染め業者は、型友禅を染める者も何軒かいて、呉服屋と深い関係を持っていました。

大正 5 年（1916）に市内の紺屋は、染色組合を組織しました。これは和染関係者が初めて作った団体です。

静岡市の名誉市民に人間国宝芹沢銈介がいます。芹沢は明治 28 年（1895）静岡市に生まれ、東京高等工業学校（現東京工業大学）図案科に学び、卒業後生涯の師である柳宗悦と沖縄の染物紅型（びんがた）と出会い、型染めを中心とした染色の道を歩み始めます。

芹沢は生前、静岡の染物技術を高く評価していたと言われています。

昭和 22 年（1947）、静岡の若い染物師たちが、新しい染色芸術を目指してグループを結成します。大橋隼雄をはじめとする彩紅会です。この会は、芹沢の指導を受け、昭和 31 年（1956）まで続きました。他に六彩会、萌木会などがありました。

静岡に染色工芸作家たちが育ちつつあったころ、経済復興とともに和染めの需要が増加していきます。手ぬぐい、風呂敷などの定番に加え、大漁旗や宣伝用垂れ幕など次々と注文が舞い込んできました。

静岡の染色は、多くの先人達の伝統技術によって育まれ、藍と白の素朴なコントラストの中にも力強さと単純化された美を活かしています。

昭和 35 年（1960）、市内の印物業者と悉皆業者は、合同して「静岡市染洗業協同組合」を設立し、これは後に静岡県の郷土工芸品の指定につながっていきます。

なお、静岡では型絵染のほかに、草木染蠟纈（ろうけつ）及び糊流し染の技法が受け継がれています。